

第4節 地場産業・地域資源等

1. 伝統的工芸品

(1) 豊橋筆

① 由来

豊橋筆の起源は、1804 年に京都の鈴木甚左衛門が当時の吉田藩学問所の御用筆匠に迎えられ、毛筆を製造したのが最初であるといわれている。その後幕末のころになると、吉田藩の財政も苦しくなり、節約と減俸に苦しめられた下級武士たちは、人の目に触れずに内職ができるという理由で、筆づくりに励むようになり、豊橋の毛筆生産は士族授産の仕事となった。また、豊橋地方は北部に山地をひかえ、いたちや狸などが多く棲息し、原料が容易に入手できた。筆管の材料である竹も豊富にあったため、副業として十分成り立っていた。

明治に入り教育が普及すると、毛筆の需要は著しく増加し、廃藩置県により職を失った渥美郡高師村（現豊橋市）の芳賀次郎吉が、筆造りの技術向上のため東京へ修行に出向き、従来の芯巻筆の製法ではなく、現在の水筆の製法を身に付けてこの地に戻ってきた。その後、明治7年に弟子入りした渥美郡豊岡村（同上）の佐野重作の並々ならぬ才能と努力で豊橋筆は有名となり、地場産業として定着した。

豊橋筆が日本国中にその名を知らしめるきっかけは、本市が交通の要衝であったことにもよる。本市は、東海道五十三次のほぼ中間地点であり、奈良の墨商人が上京の折、この地で豊橋筆の存在を知り、東京への販路拡大を進言したことも豊橋筆の名声を高めるきっかけとなった。

このような結果、豊橋筆は脈々と伝統を受け継ぎ、昭和 51 年 12 月 15 日には歴史と品質が高く評価され、通商産業省（現経済産業省）より「伝統的工芸品」の指定を受けている。

② 特徴

豊橋筆の最大の特徴は、水を用いて練りまぜをすることである。そのため墨をよく吸い、墨になじみやすく、書き味がすべるようだと多くの書家から絶賛を集めている。現在では広島県熊野町について全国 2 位の生産本数を誇っており、特に高級品の分野に関しては、生産数量、金額とも他産地を大きく引き離し、高級品の約 7 割は本市で生産されている。

筆の良否は原毛の選別にあると言われ、豊橋筆の質の高さもここに起因している。豊橋筆は長い経験を経た職人が山羊、馬、いたち、狸、鹿など多くの獣毛の性質を熟知し、各々の長所を合わせて一本の筆を作りあげている。また、豊橋筆は筆師が全て手作りで製作しているので、材料とともに筆師の技術・能力に筆の良否がかかっている。豊橋筆は優秀な筆師に恵まれ、伝統的な技術・技法を継承しており、現在活躍する伝統工芸士は 7 人を数えている。しかし、企業規模は零細な家内工業が多く業界の高齢化も進んでいるため、後継者の確保と育成が課題となっている。

③ 伝統的な技術

- 火のしかけ及び手もみには、もみがらの灰を用いること。
- 「櫛上げ」をした後、「分板」及びはさみを用いる寸切りをすること。
- 混毛は、「練りまぜ」によること。
- 「おじめ」には、麻糸を使用すること。

④穂の原材料とその性質

名 称	性 質
山羊毛	毛先が良く、墨含みが良い。
馬毛(尾脇毛)	毛筋が良く、光沢、粘りがあり、弾力がある。
鹿毛	非常に弾力がある。
狸毛	毛先が良く、弾力が非常に良い。
いたち尾	毛先が良く、まとまり・弾力に富み、粘りもある。
猫毛	背の部分の毛は力強く粘りがあり、特に白猫の毛は良い。
むささび尾	毛先が良く、墨含みが良い。
りす尾	美麗、柔らかく粘りがあり、色彩豊か。
てん尾	いたち毛に似ている。

※軸の素材は、竹又は木を使用する。

⑤製造されている地域

豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市

⑥生産量、販売額など

- 生産量 約 100 万本(令和 6 年度実績)
- 販売額 約 8.5 億円 (”)
- 組合員 30 事業所(令和 7 年 4 月現在)



「豊橋筆」

2. 地域資源・特産品

(1) 農産物

① キャベツ

本市南部をはじめ渥美半島一帯は、海洋性特有の温暖な気候や豊川用水による水利など、野菜栽培に適している。

本市のキャベツ栽培は、夏に定植し、晩秋から早春に収穫する冬キャベツが大半を占めている。

愛知県下の令和5年産キャベツ生産量は年間約273千tで、出荷量の全国シェアは約20%を占め全国第1位である。本市のキャベツの生産量は県下第2位であり、隣接する田原市と合わせて一大産地を形成している。

② 次郎柿

次郎柿の栽培が始められたのは、大正の初めに静岡県森町で育てられた苗木200本を石巻小野田町に移植したのが始めとされている。特に盛んになったのは戦後である。蚕都といわれた本市における養蚕業の衰退から、桑畑が次々に柿畑に変わっていき、当初、富有柿などの他品種も導入されたが、その後、食味の良さに加え病気に強く、人工受粉などの手間をあまり要しない次郎柿が定着し、現在に至っている。

特に北部地域は昭和44年から県営開拓パイロット事業により大規模な柿園地造成が実施され、令和6年現在JA豊橋柿部会を中心に栽培が行われ、生産者数300名、栽培面積204ha、生産量約2,287tをあげ、次郎柿の日本一の産地を形成している。出荷の約7割は関東地区向けで、残りが中部・関西地区向けである。その他の次郎柿の産地としては、三重県多気郡多気町、静岡県浜松市などがある。

次郎柿は、果肉がしっかりとおり、やや硬めで歯ごたえがある。また、富有柿などがさっぱりした甘さであるのに対して、コクのある甘味をもっている点が特徴的である。

③ 大葉

大葉はいわゆる「青じそ」で、刺身のつまや天ぷらなどに使われるポピュラーなつまものである。本市で栽培が始まったのは昭和30年代で、試行錯誤の後、豊橋温室園芸農業協同組合に大葉部会が設けられ、市内全域に広がり、昭和50年までに本市を代表する作物に成長した。愛知県下の令和4年産施設作付面積は約144ha、生産量は約4,020tであり、豊橋市と豊川市で一大産地を形成している。

食生活の多様化に伴い、現在では家庭内での香味野菜としての利用も増えてきているほか、新用途開発として大葉で作るヘルシージュースなどにも力を入れ、需要の拡大に努めている。また、東三河地域は、きく花や花穂など他のつまものの生産も盛んで、日本一の産地になっている。

④ エディブルフラワー（食用花）

昭和45年から「さくら草」、「きんぎょ草」の栽培が始められ、トレニア、プリムラなど各種の花を取り入れ、「飾る・香る・食べる」花としてエディブルフラワーの生産が平成元年より始められている。サラダや主菜の皿に飾ってもよく、近年はSNSの流行に伴い再び注目を集めつつある。

現在では、市内に17名の生産者がおり、豊橋温室園芸農業協同組合の生産量は日本一となっている。

⑤トマト

本市におけるトマト栽培の歴史は古く、明治 40 年に営利栽培に成功したのが始まりとされている。本市は、冬でも温暖で日照に恵まれていることから温室での栽培が主に行われており、ほぼ 1 年を通じて市場に出荷されている。

また最近では高度な環境制御技術を導入した養液栽培の普及により生産性を大幅に向上させたほか、消費者ニーズを捉えたブランド化による販売戦略などの取組が高く評価され平成 30 年度に天皇杯を受賞している。

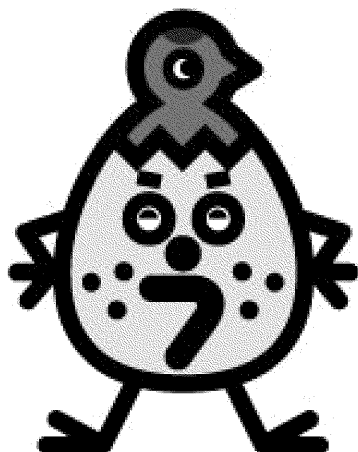
本市の令和 5 年産冬春トマトの栽培面積は約 110ha、生産量は約 11,900t となっている。

⑥うずら

うずらが飼われるようになったのは大正 10 年頃からで、本市で自然交配させた雛が全国各地に広まった。うずらの飼育が盛んになった理由としては、気候温暖で飼育に適しており、東京、大阪の二大市場の中間に位置し、交通の便が良いことなどがあげられる。

愛知県は、うずら卵の生産では全国シェアの約 68%を占め、そのほとんどが本市を中心とした東三河地域であり全国でも有数の産地を形成している。他の生産県としては、千葉県・群馬県・埼玉県・静岡県などがあげられる。

本市では、5 戸の農家が約 156 万羽を飼育しており、1 日あたり 125 万個余の生産量となっている。各農家から集荷された卵はゆで卵にされ、殻をむいた水煮の形で加工食品として全国に業務用、給食用として出荷されたり、生でパック詰めになされ、名古屋をはじめ関東・関西方面を中心に出荷されている(羽数は令和 7 年 2 月 1 日現在)。



豊橋のうずら応援マスコットキャラクター 豊橋の農業営業本部長「うずラッキー」

- ・年 齢：ずっと 4 歳
- ・性 別：男の子
- ・身 長：45cm
- ・胴 回：90cm
- ・性 格：いたずら好きで天真爛漫で
ひとなつつこい。寒さが苦手・・・。

(2)食料品

① 焼きちくわ

ちくわは、その昔「かまぼこ」と呼ばれ、神功皇后(400 年頃)が三韓渡航の折に生田の杜で銚の先に魚肉の潰したものを塗りつけて焼かれた事から始まったと伝えられている。全国的に有名な「豊橋ちくわ」の生産は、文政年間、当時魚問屋を営んでいた佐藤善作が、同業者と四国の金比羅宮に出かけた際、名物として売られていたちくわをみて作りだしたのが始まりである。その後、機械化への積極的な取り組みや製法の工夫等の品質向上により屈指の特産品として発展を遂げた。

現在、ほとんどの製造工程は手作業で行われているが、微妙な塩加減など味付けは長年の経験に頼るところが大きく、修練を積んだ技術が要求されるため後継者の育成が今後の課題となっている。

豊橋ちくわは比較的穴が小さく、中央部分だけに焼き色を付けるのが特徴で、原料は主にスケトウダラが使用されているが、高級品にはグチ、エソ、ハモなどが使用される。

②三河つくだ煮

つくだ煮は、徳川家康が本能寺の変(1582年)により大阪からの脱出を試みた時、摂津・佃村の漁師たちから道中食として小魚煮を与えられたと、言い伝えが有るほど、この地に密着した日本古来の保存食である。三河湾で獲れる豊富な魚貝類などの原料に、地域の本醸造醤油やみりん、そして地元産の芋から採った水飴を活用している。伝来の「カケダレ技法」により、仕上がり時に「照り」や「優しい甘辛さ」を引き出し、保存効果も高めている。新鮮な幸をもたらす海や河川に囲まれたこの土地、徳川家のお膝元、東海道の漁師町であり、宿場町であったこの本市で育った美味が、職人の手によって伝えられている。

現在では「小女子」「鰯」「秋刀魚」「鰻」「あさり」「しじみ」「鰹」「鮪」「昆布」「くるみ」「うずら卵」等々、各地の海産物や山の幸までも、独自の技で巧に炊きあげ、商品の多彩さは日本一である。

③ゼリー

ゼリーは、大正初期に田原市の鈴木菊次郎により、「翁飴」をもとに水あめと砂糖を寒天で凝固させ、オブラートで巻くことにより商品化された。また、商品化に欠くことのできないオブラートは、でん粉を原料に鈴木菊次郎が発明したといわれている。

本市でオブラート巻き寒天ゼリーの製造が盛んになったのは、ゼリー発祥の地・田原に近く、製法・技術を受け継ぎやすかったこと、主原料の水あめの入手が容易であったこと、そして、ゼリーの包装工程で必要な手先の器用な従業員を確保しやすかったことなどがあげられ、現在では全国生産の8割以上を生産し、日本一の産地を形成している。

④豊橋カレーうどん

本市のうどんは100年以上の歴史があり、自家製麺率100%でうどんの消費量も多いことから、平成22年4月に「豊橋カレーうどん」が発売された。丼の底の方に“とろろごはん”があり、普通のカレーうどんでは麺を食べた後に残ってしまうルーを美味しく食べきれるように工夫がしてある。また、トッピングに本市特産のうずら卵を使用するほか、店独自のトッピングや味付けが楽しめる。



「豊橋カレーうどん」

(3)工業製品等

製造業を営む事業所は、市内に715事業所あり、このうち従業者数30人未満は全体の72.2%の516事業所、300人未満は97.3%の696事業所となっているが、優れた技術力に裏付けられ、国内外において高いシェアを誇っている製造品がある。(2020年工業統計調査(従業者4人以上))

①産業用フィルム

自動車・機械部品などの包装や長期保管・梱包に使用される錆びを防ぐフィルム。このうち気化性防錆

剤を主成分とする防錆フィルムは、優れた防錆効果を発揮し、世界でトップのシェアを誇っている。

②荷重計測器

旅客機の操縦桿・各種スイッチ類の適正な操作状況を高精度に測定する機器で、昭和 20 年代初頭に国内で初めて商品化され、頑丈で長期間にわたり高精度の測定能力を維持することができる。

③編網機

近海や遠洋で使用する魚網を製造する機械で、約 50 種類ほど生産、世界 50 カ国以上に輸出し、50%以上のシェアを有している。機械の大きさは、横幅だけで 5m 以上あるものもある。

④温室栽培用施設

採光、換気、作業効率等を考えて、屋根を全自動フルオープンにしたり、柱の数を少なくしたりするなど、露地から温室栽培への切替えやあらゆる作物栽培に適応するガラス温室を製造している。

⑤刺子半纏及び帆前掛け

半纏は元来、江戸のものと言われており、同じものでも上方では法被と呼ばれていた。三河地方では、両方の名称が通用し今では全国的に半纏あるいは印半纏と呼ぶ人は少なくなり法被という名称が一般的となっている。大別すると火消半纏、祭半纏、仕事半纏に分けられており、その素材は、当地三河木綿と共に伝統の刺し子生地を使い、昔ながらの印染技法により製造されている。製造方法は図柄、文字などを切り抜いた型紙にもち米の粉を主原料とした糊にて、生地の上に糊付けし、赤色、その他彩色し釜の中で染色後、水洗い、乾燥して仕上げたものである。

火消し半纏は全国的には、「かつらぎ」という木綿の布で出来ているのが一般的であるが、刺し子半纏に限れば、現在でも近畿・九州・四国・東海及び北海道で多く使用されており、全国から本市印染業界へ発注がある。

帆前掛けは、戦後、全国の酒蔵を初めとしたあらゆる業種において、会社や商品などの広告媒体として各地に広がった。本市では昭和 30～40 年代にかけて需要が高まり、最盛期には 1 日 1 万枚もの出荷があり、100 軒ほどの製造者がいたと言われている。元来の広告宣伝や腰、服を守る「仕事着」としての活用の他に、現在では、のれんやひざ掛けとして使用する等、その使い方は多様化している。

⑥煙火

三河地方は江戸時代から火薬製造の歴史があり、特に東三河では打ち上げ花火や手筒花火の製造が盛んである。特に手筒花火は、本市が発祥であると言われ、市内各所の地域の祭礼で放揚されている。手筒花火は竹筒に火薬を詰め、それを人が抱えて放揚し、轟音とともに 10m 以上の炎を吹き上げた最後に、「バン」という轟音とともに筒底が抜け、足元に炎が広がる「ハネ」が特徴である。また、手筒花火は放揚する本人自らが手筒花火を製作することも特徴にあげられる。

上記のほかにも、レジャー用携帯魚群探知機、電池缶など金属を底付円筒状の形状にする深絞りプレス加工技術や 100 万分の 1g の超微細プラスチック歯車を製造するなど、優れた技術力を有する事業所が数多くある。

第5節 三河港の概況

1. あゆみ

昭和 37 年に豊橋港、蒲郡港、田原港、西浦港を統合して愛知県の管理する港湾法上の「三河港」が誕生した。その後、昭和 39 年には重要港湾に昇格し、昭和 47 年に関税法上の開港となった。開港となったことで外国との貿易が出来る港の仲間入りを果たすことになる。(この時点で関税法上では三河港ではなく豊橋港であったため、豊橋港として国際貿易港となった。)国際貿易港となった豊橋港は急速な発展を遂げ、地域だけではなく、日本の成長をも支える港へと変貌を遂げていく。

昭和 50 年代には三菱自動車、トヨタ自動車、スズキといった日本国内の自動車メーカーが三河港から世界各地に完成自動車の輸出を開始し、三河港は日本を代表する自動車港湾への道を歩み始めた。また、三河港は日本のほぼ中央に位置するという地理的優位性もあり、平成に入るとメルセデス・ベンツ、フォルクスワーゲングループといった海外自動車メーカーが三河港から完成自動車の輸入を開始し、平成 4 年にはフォルクスワーゲンアウディ日本(当時)が本社を東京から豊橋に移すまでになった。平成 5 年には完成自動車の輸入台数及び金額で日本一となり、平成 10 年には完成自動車の輸出金額で日本一となった。その後、完成自動車輸入に関しては、平成 22 年 3 月にメルセデス・ベンツが三河港からの陸揚げを撤退したが、平成 26 年 8 月より陸揚げを再開した。平成 23 年 3 月にフィアットが、平成 25 年 8 月にはプジョー・シトロエン・ジャポンが三河港に陸揚げ拠点を移した。そして、令和 6 年まで 32 年連続して日本一の座を守り続け、日本を代表する自動車港湾としてリード役を果たしている。

さらに、三河港では背後圏にある自動車産業集積地の強みを活かして、平成 10 年に「三河港豊橋コンテナターミナル」が運用を開始し、コンテナ貨物の取扱いがスタートした。その後、平成 20 年には 2 基目のガントリークレーンが供用開始した。

平成 22 年、三河港は重要港湾 103 港の中から、国の新規直轄港湾整備事業の対象となる重点港湾 43 港に選定された。

平成 23 年 5 月に将来のみなとづくりを示す港湾計画の改訂を行い、国際的な物流・産業拠点の形成や環境共生・循環型社会づくりへの貢献などの基本方針を定めた。

平成 25 年 3 月から規制緩和により、インポーターの新車整備センターでの納車が可能となり、平成 26 年 10 月にメルセデス・ベンツの新車整備センターにおいて、封印取り付けによる第 1 号が納車された。「デリバリーコーナー」を全国で初めて実施した豊橋 VPC では、整備直後の新車をそのまま運転して持ち帰るという体験が好評で、令和元年 5 月には 200 台目の納車式が行われた。

平成 31 年 3 月には一定条件の下で後面の仮ナンバー表示を省略できる国際自動車トレード特区に認定され、回送運行業務の効率化が図られた。

令和 4 年に三河港自動車流通強化支援事業の新たなメニューとして、環境負荷の少ない EV 等を輸入するインポーターに対して、助成を行う制度を新設した。

令和 5 年 4 月には Hyundai Mobility Japan が神野地区に新車整備センターを設け、陸揚げを開始した。

令和 7 年 3 月には名豊道路が全線開通し、豊橋～名古屋間の移動時間が約 50 分短縮され、アクセスが向上した。

2. 概要

三河港は周囲約 80 キロメートル、水域面積約 132 平方キロメートルを有し、全国 8 位の広さを持つ港である。また、背後圏には自動車産業を中心に多くの製造業が立地しており、令和 6 年の輸出貿易金額は約 3.7 兆円あり、輸入貿易額は約 0.9 兆円となっている。輸出自動車の取扱台数は約 77.1 万台、前年比 89.6%である。一方輸入自動車の取扱台数は約 12.6 万台、前年比 60.4%となっている。

(1) 港湾施設

①岸壁

水深(m)	公共		専用	
	延長(m)	バース数	延長(m)	バース数
-12.0	240.0	1	935	4
-12.0～-11.0	970.0	4	0	0
-11.0	350.0	2	0	0
-10.0	1,295.0	7	2,135.0	10
-7.7～-7.3	2,085.0	16	636.1	4
-6.0～-4.0	3,486.0	51	1422.6	16

バース	7 号	8 号
数量	1 基	1 基
アウトリーチ	29m	29m
取扱個数	44.3 個／時(理論値)	44.1 個／時(理論値)

(2) 定期コンテナ航路(令和 7 年 4 月現在)

①外貿易航路

航路	船会社	寄港地	寄港回数
韓国	KOREA MARINE TRANSPORT CO.,LTD. (高麗海運)	蔚山／釜山／清水／名古屋／ 四日市／三河／蔚山	週 1 回 (土)
韓国	Heung A Line Co.,Ltd. (興亜 LINE)	蔚山／釜山／東京／横浜／ 名古屋／三河／蔚山	週 1 回 (水)
韓国	Pan Continental Shipping Co.,Ltd. (汎洲海運)	蔚山／釜山／清水／東京／ 三河／四日市／名古屋／蔚山	週 1 回 (木)

②国際フィーダー

船会社	オリエントオーバーシーズコンテナラインリミテッド (OOCL)		
寄港地	京浜港	三河	中京地区港湾

③内貿航路

寄港地	袖ヶ浦	四日市	三河
-----	-----	-----	----

寄港地	三河	仙台	小名浜
-----	----	----	-----

寄港地	大分	三河
-----	----	----

3. 貨物取扱数量の現況

(1) 貨物取扱数量の推移

三河港の貨物取扱数量は、外貨については海上輸送ルートの混乱や運賃の高騰など複数の要因が重なり、主要取扱品目である完成自動車の輸出入台数が減少したため、令和6年は輸出・輸入ともに前年比減となった。一方で、いわゆる「物流の 2024 年問題」により陸上輸送から海上輸送へのモータリシフトに注目が集まり、内貨の取扱量については移出・移入ともに引き続き増加傾向にある。

○貨物取扱量の推移

単位:t

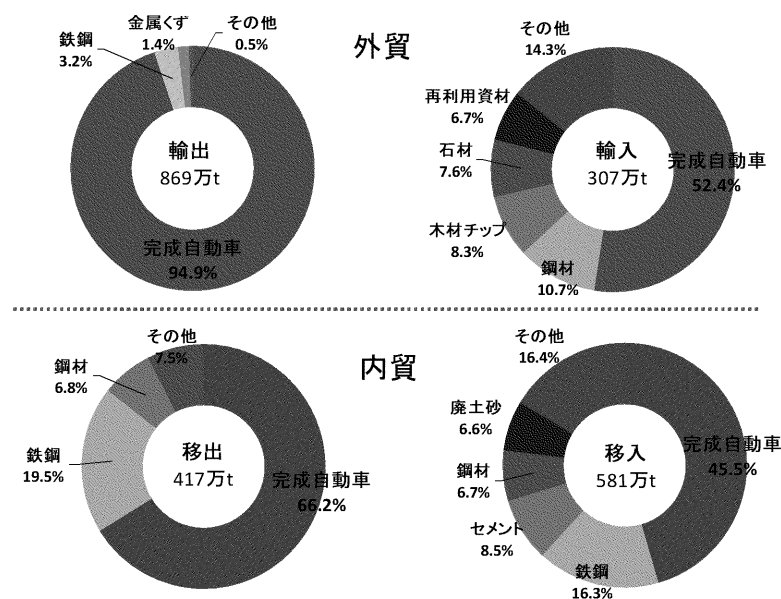
年	外貨		内貨		合計
	輸出	輸入	移出	移入	
平成 27 年	9,296,526	2,927,428	3,074,040	6,587,424	21,885,418
28 年	9,427,402	2,780,168	2,738,571	4,663,186	19,609,327
29 年	10,103,261	3,172,564	3,209,894	4,829,112	21,314,831
30 年	10,534,648	3,433,746	3,660,509	5,906,186	23,535,089
令和元年	10,252,691	3,437,927	3,257,699	4,949,837	21,898,154
2 年	8,248,791	2,675,804	3,190,826	4,316,860	18,432,281
3 年	8,624,495	3,137,876	3,548,599	4,654,791	19,965,761
4 年	8,066,999	3,191,429	3,708,851	4,712,552	19,679,831
5 年	9,917,632	3,630,455	3,936,901	5,752,840	23,237,828
6 年	8,694,232	3,065,238	4,170,821	5,809,795	21,740,086

資料:三河港務所提供

(2) 令和 6 年取扱貨物の内訳

三河港の主要取扱品目は輸出入・移出入ともに完成自動車がトップとなっており、特に輸出においては取扱量の 94.9%を完成自動車が占めている。

《三河港 輸移出入 貨物主要品目割合》



資料:三河港務所提供

4. 貿易金額の現況

(1) 貿易金額の推移

三河港の貿易金額は、新型コロナウイルス感染症により令和 2 年に大幅な減少をしたが、その後は持ち直してコロナ禍前の水準まで戻った。令和 5 年からは、半導体不足の解消や円安により完成自動車の輸出額が大きく伸び、令和 6 年も円安の加速により輸出額が続伸し、輸出入額が 4.5 兆円を超える年が続いている。

○貿易金額の推移

(単位:百万円)

年	輸 出 額	輸 入 額	輸 出 入 額
平成 27 年	2,697,302	637,265	3,334,567
28 年	2,388,062	640,879	3,028,941
29 年	2,571,564	711,982	3,283,546
30 年	2,639,526	780,267	3,419,793
令和元年	2,542,388	826,679	3,369,067
2 年	2,057,577	653,174	2,710,751
3 年	2,337,873	759,104	3,096,977
4 年	2,531,038	871,316	3,402,354
5 年	3,627,078	1,144,474	4,771,552
6 年	3,741,291	865,618	4,606,908

※令和 6 年の値は確々報値

(2) 令和 6 年貿易額港別順位

三河港の輸出総額において、前年比で 3.1%増加し全国第 9 位、輸入では 23.3%減少し全国第 27 位、輸出入全体で第 10 位となった。

○輸出

(単位:百万円)

順位	港名	金額	順位	港名	金額
1	成田空港	17,511,082	6	関西空港	6,811,400
2	名古屋	16,165,927	7	大阪	4,638,977
3	横浜	8,538,595	8	博多	4,617,600
4	東京	8,164,996	9	三河	3,741,291
5	神戸	7,374,666	10	清水	2,156,606

○輸入

(単位:百万円)

順位	港名	金額	順位	港名	金額
1	成田空港	19,322,350	7	神戸	4,673,656
2	東京	16,455,176	8	関西空港	4,645,906
3	名古屋	7,569,310	9	川崎	2,872,364
4	大阪	6,365,917	10	四日市	2,399,071
5	横浜	6,299,428	⋮	⋮	
6	千葉	5,298,522	27	三河	865,618

○輸出入

(単位:百万円)

順位	港名	金額	順位	港名	金額
1	成田空港	36,833,432	6	関西空港	11,457,305
2	東京	24,620,172	7	大阪	11,004,894
3	名古屋	23,735,237	8	千葉	6,639,348
4	横浜	14,838,023	9	博多	6,110,717
5	神戸	12,048,322	10	三河	4,606,908

資料:貿易統計

5. 完成自動車の取扱の現況

完成輸入自動車の取扱量は金額・台数ともに過去最高を記録した令和 5 年からは減少したものの、平成 5 年以来 32 年連続で日本一を記録した。また完成輸出自動車の取扱量は名古屋港に次いで全国 2 位を維持した。

○完成自動車の取扱推移

(単位:百万円、台)

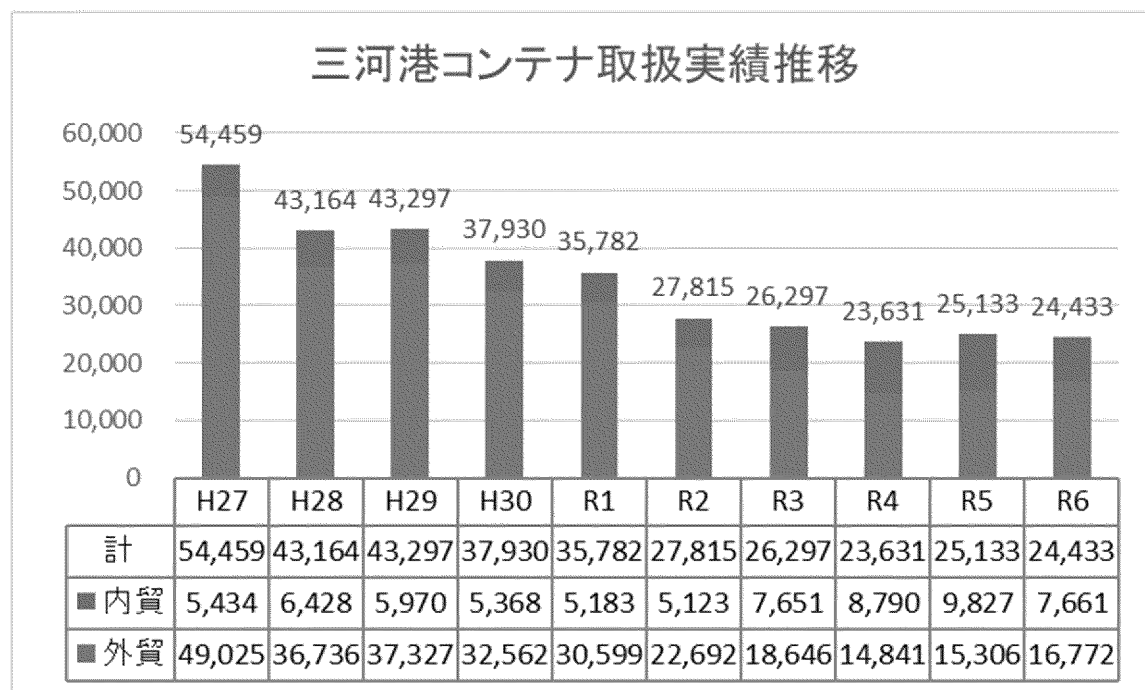
	輸 出					輸 入				
	順位	港名	金額	数量	順位	順位	港名	金額	数量	順位
令和 2 年	1	名古屋	2,557,072	1,113,997	①	1	三河	572,293	160,933	①
	2	三河	1,956,705	753,493	②	2	千葉	220,092	47,942	②
	3	横浜	927,475	567,196	③	3	日立	160,466	30,478	④
	4	広島	806,267	322,846	⑤	4	横浜	92,875	24,551	⑤
	5	荏田	766,815	357,051	④	5	成田空港	61,604	33,649	③
	全国計		9,579,635	4,837,815		全国計		1,165,326	310,020	
令和 3 年	1	名古屋	2,881,407	1,168,358	①	1	三河	672,418	176,237	①
	2	三河	2,191,221	795,247	②	2	千葉	234,351	51,591	②
	3	横浜	1,212,235	655,755	③	3	日立	199,083	28,270	④
	4	広島	908,154	378,155	④	4	横浜	108,998	25,032	⑤
	5	博多	863,586	302,975	⑤	5	横須賀	87,980	46,004	③
	全国計		10,722,391	5,064,359		全国計		1,371,847	342,114	
令和 4 年	1	名古屋	3,386,598	1,197,949	①	1	三河	752,401	174,521	①
	2	三河	2,389,230	728,854	②	2	千葉	266,089	50,656	②
	3	横浜	1,412,087	655,087	③	3	日立	248,223	33,261	③
	4	広島	1,123,384	382,539	④	4	横浜	125,710	25,783	④
	5	博多	941,448	277,343	⑤	5	横須賀	33,888	14,808	⑤
	全国計		13,011,638	5,063,188		全国計		1,512,277	317,232	
令和 5 年	1	名古屋	4,557,140	1,451,853	①	1	三河	1,007,516	209,301	①
	2	三河	3,465,105	860,294	②	2	千葉	323,173	55,176	②
	3	横浜	1,646,289	753,239	③	3	日立	283,383	33,056	③
	4	荏田	1,340,975	341,094	⑤	4	横浜	128,863	24,717	④
	5	広島	1,323,313	434,697	④	5	横須賀	57,956	19,249	⑤
	全国計		17,265,388	5,971,295		全国計		1,922,877	364,872	
令和 6 年	1	名古屋	4,849,177	1,462,878	①	1	三河	737,901	126,399	①
	2	三河	3,598,639	770,960	②	2	千葉	340,833	57,603	②
	3	横浜	1,562,634	719,395	③	3	日立	295,267	31,351	④
	4	荏田	1,388,300	306,469	⑦	4	横浜	136,203	18,427	⑥
	5	日立	1,355,371	316,854	⑥	5	名古屋	111,159	25,287	⑤
	全国計		17,909,381	5,798,820		全国計		1,845,153	332,017	

※令和 6 年の輸入は 9 桁速報値、輸出は確報値

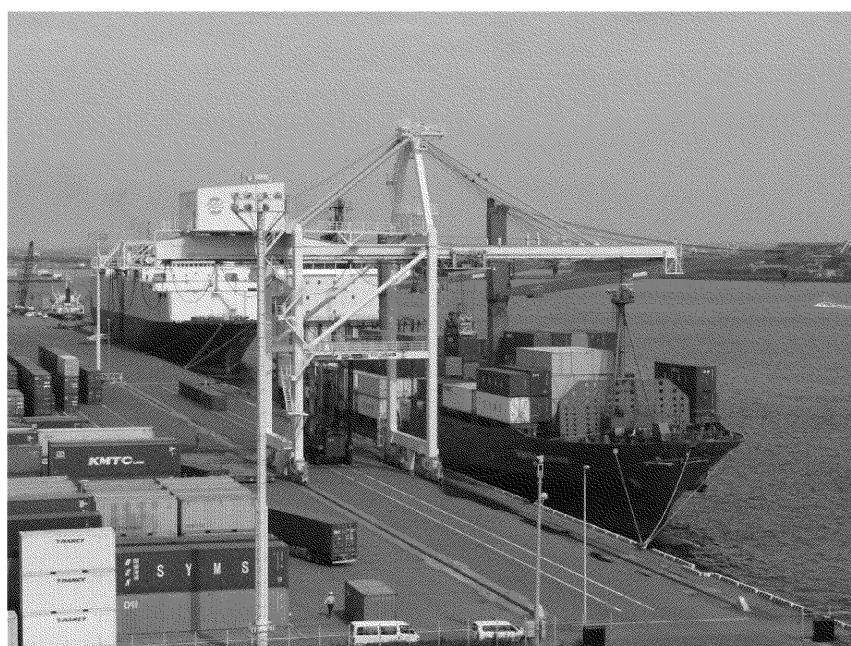
資料:貿易統計

6. コンテナ取扱数量の現況

平成 27 年 6 月のロシア航路廃止や近年の航路再編等の影響により徐々に取扱数量が減少していった。併せて新型コロナウイルス感染症の世界的な流行による経済停滞のあおりを受け、減少幅が広がっていき、新型コロナウイルス感染症の影響が小さくなった令和 5 年はやや回復したものの、令和 6 年度は再び減少に転じた。



資料：三河港務所提供



「三河港コンテナターミナル」